

タブレット端末を活用した日中学校間映像交流の実践

SAKAMOTO, Jun / 坂本, 旬

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

93

(終了ページ / End Page)

116

(発行年 / Year)

2015-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010727>

タブレット端末を活用した日中学校間映像交流の実践

法政大学キャリアデザイン学部 教授 坂本 旬

はじめに

今日の東アジアは領土問題や歴史問題といった困難な政治的な課題を抱えている。日本はアメリカのように多様な民族や人種が集まる国ではないが、今日のアメリカでさえ、ミズーリ州ファーガソンでの人種差別を引き金にした暴動が起こる。Public Religion Research Institute が2013年に行った調査によると、アメリカでは平均的な白人の友人は91%が同じ白人で、黒人もアジア系も、ラテンアメリカ系もそれぞれ1%に過ぎないという⁽¹⁾。ファーガソンの事件は民族や人種を越えた対話の難しさを示したものだといえるだろう。

一方、日本では中国や韓国などの近隣アジア諸国出身者を数多く見かける。コンビニや居酒屋に行けば、アルバイトをしている中国人留学生と出会うことは普通の光景となっている。しかし、残念ながら、日本と在日外国人との間にはまだ大きな心の壁がある。

近年、日本でもっとも大きな問題となっているのは、とりわけ在日コリアンに対するヘイトスピーチの問題である。かつてこんな現象は日本には見ることができなかった。インターネットの普及は、多様な文化を持った人々の間を結びつけるよりも、心の壁をますます大きくしつつあるといえてよい。とりわけ若い世代に韓国や中国を嫌う人が多くなったことは大きな問題であるといえよう。この背景には、マスメディアの偏った報道だけではなく、インターネットが偏ったイメージを増幅してしまうという問題がある。

2014年7月に言論NPO・東アジア研究院が公表した日韓共同世論調査によ

ると、日本人の54.4%が韓国に悪い印象を持ち、韓国人の70.9%が日本に対して悪い印象を持っている。いずれも過半数を超える国民が相手国に対して悪い印象を持っているのである。一方で、日本人の82.2%、韓国人の87.2%が相手国の人に知り合いがないと答えている⁽²⁾。

同団体は日中間でも同様の調査を毎年行っているのので、それについても紹介しておこう。2014年9月に公表された結果によると、両国国民が持つ互いの印象はさらに悪く、日本人の93.0%が中国に対して「良くない」もしくは「どちらかといえば悪い印象」を持っており、他方、中国人の場合は86.8%が日本に対して「良くない」もしくは「どちらかといえば悪い印象」を持っている。残念ながらこの調査にはお互いの国の知り合いについての問いがないが、「相手国や日中関係についての情報源」に関する質問項目がある。これを見ると、日本人が中国人から直接の会話から情報を得ると答えた人は3.5%にすぎず、もっとも多かったのはニュースメディアであり、96.5%にのぼる。他方、中国人の場合は日本人との直接の会話が1.0%、中国のニュースメディアは91.4%である⁽³⁾。

これらの調査からわかることは、相手国へのイメージは個人間の関係ではなく、ニュースメディアの影響によって作られているということである。先ほどの調査をもう少し詳しく見てみると、日本人が自国の日中関係の報道を「客観的で公平」と見なしているのは26.8パーセント、「そうは思わない」が30.5%であるのに対して、中国人の場合は73.9%、同13.3%と大きな差がある。これは中国での報道が政府によってコントロールされていることと無関係ではないだろう。また、「インターネット上の世論は民意を適切に反映しているか」という問いに対しては、「適切に反映していない」および「あまり適切に反映しているとは思わない」を合計すると51.7%、中国人の場合は50.9%となっており、どちらもおよそ半数が否定的である。つまり、ネット時代といわれる今日にあっても、インターネットの影響よりもテレビのニュース報道の影響のほうが大きいことがうかがえる。

こうした状況から、教育は何をすべきであろうか。まず、マスメディアが作り出す偏った外国や外国人のイメージを批判的に考える力を子どもや若者たちに育てることが当該国の教育にとって不可欠であるといえる。この考え方はまさに従来言われてきた伝統的なメディア・リテラシー教育観に合致する。しか

し、この問題はそのような主張だけでは解決しえない。

第一に、多くの国家にとって、概して自国民の批判的視聴力の育成としてのメディア・リテラシー教育の推進に後ろ向きである。第二に、批判的視聴能力の育成が国民の相互理解に直接役立つわけではない。そのためには、これまで「異文化理解教育」や「国際交流教育」と呼ばれていた教育領域との接合が不可欠である。第三に、こうした問題は一カ国だけで解決するものではなく、国際的な枠組みのもとで進めなければ実現は困難であろう。

こうして、問題解決の枠組みを提供しうるのは、目下のところ、ユネスコと国連文明の同盟（UNAOC）が世界的に推進するメディア情報リテラシー教育（MIL）プロジェクトである。ユネスコは、1985年パリで開かれた第4回成人教育国際会議で学習権宣言を採択した。この中で学習権は、「読み書きの権利」であり、「問い続け、深く考える権利」であり、「想像し、創造する権利」であるとともに、「自分自身の世界を読み取り、歴史をつづる権利」であると述べられている。この学習権はリテラシーについてのものであるが、ユネスコが唱道するメディア情報リテラシーについても同じことがいえる。

ユネスコは、「メディア情報リテラシーという新しい概念を戦略的に用いることによって、情報リテラシーやメディア・リテラシー、ICT デジタル・リテラシーやその他関連する領域など、いくつかの相互に関連する概念を一つの傘となるべき概念のもとに統合した」⁽⁴⁾。そして、これら多様なリテラシーが重なり合う中心点には、それぞれのリテラシーによって追求される関心の対象、人権を土台にしたアプローチ、批判的・内省的思考、コンピテンシーの陶冶、人格的、社会的および職業的生活へのインパクト、学際的アプローチがあると見なす⁽⁵⁾。

ユネスコにとって、メディア情報リテラシーとは「拡大されたリテラシー」であり、決して、批判的視聴能力としてのメディア・リテラシー概念の焼き直しではない。つまり、学習権宣言で示された、「自分自身の世界を読み取り、歴史をつづる権利」としての学習権という思想もまた、新たなユネスコのMIL 概念に貫かれるのである。

また、ユネスコはメディア情報リテラシーを異文化間対話のツールとして重視している点も指摘しなくてはならない。ユネスコの『メディア情報リテラ

シー：戦略と政策ガイドライン』では「メディア情報リテラシーは異文化間対話、寛容、文化理解を可能にする強力な道具になりうる」⁽⁶⁾と述べられている。ユネスコは国連機関のひとつであり、一国だけではなく、国際的な視点から教育政策・運動を推進するのはむしろ当然のことであるが、日本国内での議論の多くが発展途上国を含めた全地球的な観点^{グローバル}を欠落させがちであることを考えると、ユネスコの理論・政策をもとに新たな教育実践を進めていくことがもっとも理にかなったものであると考える。

本実践にいたる経緯

筆者が映像による日中学校間交流を最初に計画したのは2005年のことである。この年の5月、上海交通大学、上海政法学院および市内の実験小学校などを訪問し、何人かの研究者や教職員、大学生と会って意見交換を行った。この時点ではメディア・リテラシー理論を土台としたビデオレター制作の実践ではなく、2003年より日米の小学校間で行っていた電子掲示板とスカイプによる交流を想定していた⁽⁷⁾。

つまり、アメリカと日本の小学校間で行っていた交流の方法をそのまま中国との交流に適用したいと考えていたのである。あくまでも事前調査の段階であったが、とりわけ英語教育に熱心であった私立小学校は交流に前向きであった。また、中国の大学生からはさらに学生同士の交流がしたいという提案もあった。

しかし、2005年は当時の小泉首相の靖国神社に反対する反日デモが中国各地でおこなれた年であり、上海でも4月に学生デモが行われたばかりであった。さらに同年10月17日に再び小泉首相が靖国神社を参拝し、日中関係は悪化する。このような状況下で、実践計画は中止せざるを得なかったのである。

筆者が再び日中学校間交流実践を計画したのは、2009年のことである。同僚の山田泉教授とともに財団法人国際交流フォーラムを訪れ、大連市立第十六中等学校（6年制のため、日本でいえば中高一貫校にあたる）を交流対象校として紹介されることになった。この学校は日本語教育に熱心であり、同財団との関係が深かった。また、山田教授には大連外語大学（当時は大連外語学院）を紹介していただき、本実践の支援をしていただくことになった。同時に、筆者

自身もまた本大学で実践をすることになった。

一方、日本側の交流対象校は法政大学付属第二中学校となった。付属校であることもあり、本実践に対する理解を得やすかったからである。ただし、正規の授業として行うのは困難であったため、中国に修学旅行に行く生徒たちの事前学習として位置付けることになった。（その後、日中関係の悪化に伴って中国への修学旅行は中止となり、壱岐対馬へと変更になった。）

2010年3月15日、筆者は初めて大連外語学院（当時）および大連市立第十六中等学校を訪れ、両校関係者に実践計画を説明し、承諾を得た。第十六中学校は大連市の中心にあり、日本語教育に力を入れている学校のひとつである。生徒は英語または日本語を選択し、第二外国語として学ぶことができる。この実践に参加することになったのは日本語を学ぶ中等学校4年生約20人である。

同年5月18日には法政大学付属第二中学校で打ち合わせを行った。中国への修学旅行に参加する生徒は約70名と人数が多いが、正課授業が終了した7月中旬の3日間を使うことができることになった。

大連市立第十六中等学校での最初の実践は翌年5月20日に行った。この日の2時限（100分）を用いて、映像の読み解きと絵コンテづくりを教えることができた。しかし、パソコンもビデオカメラもないため、実際のビデオレター制作はすべて先方に任せるほかなかった。

中国の中等学校ではパソコンを使った授業はあるが、メディア・リテラシー教育は行われておらず、もちろん映像の読み解きや制作を教える授業はない。普通教室やパソコン教室ではメディアの授業はできないため、特別に大型液晶ディスプレイのある教員用会議室を使用することになった。

生徒たちは教師に頼ることなく、自分たちだけで制作しなければならなかったが、それでもこの年は9本の作品を制作し、法政第二中学の生徒に見せることができた。しかし、残念ながら、翌2012年に中国の生徒が制作した作品は2本だけであった。

法政第二中学校側の最初の授業は2011年7月12～14日である。中国の生徒が作った作品を見た後、その返信を制作するのである。10程度のグループに分け、班ごとに大学のビデオカメラを貸し出して、撮影を行った。編集はパソコン教室のコンピュータを使用した。生徒だけでは難しいため、最終的には大学生

が手伝う必要があった。

日常的な交流は国際交流フォーラムが作った国際交流 SNS「つながーる」を活用することにした。しかしこの SNS を利用できるのは、中高生だけで、大学生は利用することができない。つまり、ゼミ生が参加して両校の生徒のチューター役を担うことができないという問題があった。そのため、登録するだけで、実際に活用するまでに至らなかったのである。また、2013年9月には「つながーる」そのものが廃止となり、利用することができなくなった⁽⁸⁾。

このように、2011～2012年にかけて行われた実践は、ハードウェア上の制約から、授業だけでは完結せず、大学生が映像を完成させる必要があった。こうした状況を大きく変えたのはタブレット端末 iPad mini の導入である。法政大学情報メディア教育研究センターはタブレット端末活用研究のため、iPad mini を20台導入したが、それを本研究のために活用することが可能になったのである。

本実践には、ビデオメッセージ、ビデオレター、デジタル・ストーリーテリングという3つの映像制作の形式が登場するが、これらは発達段階と学習環境の中でふさわしいものが選択される。本実践には含まれていないが、このほかにスカイプによる電子会議や電子黒板を用いた遠隔協働、ドキュメンタリー制作といった学習方法もある。これらにはそれぞれ利用するのにふさわしい発達段階と学習環境があるが、これについては本論文では触れない。

大連外語大学におけるデジタル・ストーリーテリング制作

2013年は、大学と中等学校の二つのレベルで iPad mini を活用する実践を行った。まず6月28日に大連外語大学日本語学部で初めてデジタル・ストーリーテリング制作の授業を行った。日程の関係で、授業はこの日のみであり、翌日の18時を作品提出の締め切りとし、その後に発表会を設定した。学生はその間に iPad mini を持ち帰って制作をすることになる。

デジタル・ストーリーテリングは自分の歴史を映像作品にする一つの学習方法である。自分のルーツを一つの物語として語る方法としてアメリカ西海岸から始まった。筆者は、毎年キャリアデザイン学部1年生約300人を対象とした「キャリアデザイン学入門」の中でデジタル・ストーリーテリングを作らせる

実践を行っているが、これと同じことを大連外語大学日本語学部の一つのクラスで行ったのである。

法政大学の実践では、全受講生が1～3分ほどの自分の物語を静止画とナレーションを組み合わせで映像にする。受講生の中には中国や韓国からの留学生も含まれる。作品の中には大学に入学するに至るまでの人生と将来に対する思いが込められており、中国の学生がこうした作品を閲覧することは、生の日本語学習になるだけではなく、日本の学生の意識に触れる機会となる。

大連外語大学で行った授業に参加した学生は日本語を履修する33名であった。学生によっては数名で一つの班を作ったケースもあるため、貸し出したiPad miniは20台である。そのうち、作品を完成させることができなかった班が3つあったため、完成した作品は全部で17であった。授業は日本語クラスを担当する孫妍講師と協力しながら進め、必要に応じて中国語への通訳をしていた。ただ、ことにした。

想定していたように、学生たちは日本の学生が作った作品に強い関心を示し、自分たちの作品制作に取り組んだ。制作用機材としてiPad mini、編集用アプリケーションとしてiMovieを用い、二日間かけて制作した。筆者はすでに2012年9月にベトナム・ホーチミン人文社会科学大学東洋学部日本語学科、同年11月にカンボジア・メコン大学日本語ビジネス学科で同様の実践を行っていたが、どちらも日本人の学生がサポートを行っていた。しかし、大連外語大学での実践は日本人学生によるサポートは一切なく、必要に応じて筆者がサポートした以外はすべて学生自身が互いに教えあいながら制作をした。

デジタル・ストーリーテリングは静止画とナレーションの組み合わせで構成されるため、ナレーションが極めて重要な役割を果たす。外国語でナレーションを録音するならば、語学力のみならず、言葉による表現力が求められる。一方、ビデオレターは動画と短いナレーション、字幕の組み合わせであるため、デジタル・ストーリーテリングほどの語学力は必要がない。さらに動きで表現できるという特徴もある。このため、大学生ほどの語学力がない中等学校レベルの交流にはデジタル・ストーリーテリングよりもビデオレターが向いているといえる。実際にデジタル・ストーリーテリングを制作した学生の感想文を以下に掲載する。

○感想（抜粋、一部日本語を修正）

Aさん（経済管理学部3年女子学生）

授業中いろいろな作品を見て、国々の学生たちの夢や日常生活についての事を耳に入りました。一番印象深いのはある日本人の女の子の作品です。あの作品の写真の基調はグレーで、話している声もとてもし心地良かったです。彼女の話は私に強い共鳴を引き起こしました。私も時々自分は一体何がしたいのかと考えている。様々な作品を見ている間、たくさんの日本語を耳に入りました。どうしても聞き取れない言葉はかなりあります。私の日本語はまだまだだなあと思って、これからはもっと頑張らなければなりません。でもたくさんの作品を見ても、自分はどんな作品を作りたいのかは全く分からなかった。午後寮に帰ったら、すぐ制作の準備をして、自分の話したいことをちゃんと考えて、ノートに書きました。もうすぐ期末試験ですから、早く復習したくて、日本語だけ上手ければ写真なんてどうでもいいと考えて、2時間もかけずに作品を完成しました。

翌日の夜、私たちは自分が作った作品が先生に渡ったとき、様々な作品を見てびっくりしました。クラスメートたちは皆私より真剣に作りました。同じ期末受験の学生として、この作業に対する態度は全然違う。私はすごく恥ずかしく思った。この作業は日本語だけでなく、写真も自分の考えも重要です。

2014年は11月4日に授業を行った。ただし、日程上の都合により、一日しか授業をする時間が取れなかったため、デジタル・ストーリーテリングの制作は行わず、筆者が担当する「メディアリテラシー実習」を履修する学生が作った公共広告と学部広告の映像と「キャリアデザイン学入門」で1年生が作ったデジタル・ストーリーテリングの作品の上映を中心に、メディアに関する基本的なリテラシーについての授業を行った。このような映像を制作する授業が大連外語大学にはないため、学生たちの関心は大変高いものであった。

さらに、今回は「ビデオメッセージ」を活用した交流学习を行った。ビデオメッセージとは企画・編集を経て作るビデオレターとは異なり、交流相手に対する直接的な呼びかけを動画で撮影し、クリップにしたものである。その場で作成できるため、今回のように一時間しかない授業で交流学习を行う方法とし

で最適である。

今回はあらかじめ筆者のゼミに所属する学生から大連外語大学の学生に向けたビデオメッセージを撮影し、その質問に対する返信ビデオメッセージを授業内に録画することにした。メッセージ録画を希望する学生に手を上げさせて、筆者が学生のところに出向き、録画するという方法を取ったのだが、選ぶのに苦労するほどの希望者が現れ、たくさんのビデオメッセージを録画することになった。

ビデオメッセージは、特別な機材は不要で、スマートフォンがあればその場で撮影・送信ができるというメリットがある。その半面、企画も編集も行わず、主に言葉だけで伝えることになるため、映像作品としての完成度は低くなる。ビデオメッセージ、ビデオレター、デジタル・ストーリーテリング、そしてより作品としての完成度の高いドキュメンタリー、リアルタイムで交流のできるテレビ電話等の映像形式には、メッセージの伝え方に違いとメリット・デメリットがあり、学習環境と学習者の発達段階に応じた使い分けが必要になるといえる。

今回、大連外語大学で撮影したビデオメッセージは再び法政大学の授業で上映し、さらにその返信を法政大学の学生が制作することで少しずつ相互の理解が深まっていくことが期待できる。なお、このような実践は法政大学とカンボジア・メコン大学の間でも行っているが、これらの実践については別途稿を改めることにする。

法政大学付属第二中学校におけるビデオレターの制作

2014年に法政大学付属第二中学校で行ったビデオレター制作は次のような日程であった。参加した生徒は中学3年生男子70名であり、5人ずつ計14の班に編成されている。授業は筆者と法政第二中学校の大庭乾一教諭が協力しながら進め、各班には筆者のゼミに所属する学生が支援を行った。

7月15日（火）午後3時まで 導入～絵コンテ作成

7月16日（水）午前、午後3時まで 絵コンテ～撮影

7月17日（木）10時50分～3時まで 編集と上映会

102 法政大学キャリアデザイン学部紀要第12号

2011年度までは実際に中国への修学旅行に行くことを前提にこの実践が行われていたが、前述したように、現在は日中関係の悪化によって、中国への修学旅行は中止されており、壱岐対馬に行く予定の生徒が集まっている。そのため、学校側の事情とはいえ、中国の生徒と交流する意義を修学旅行と関連させて説明することが難しくなったという問題がある。

初日は、生徒たちに授業の目的を示し、中国のイメージについて話し合った。生徒に中国のイメージを自由に書かせると多い項目は次のようなものであった。一見して分かるように、生徒たちは中国に対して、大気汚染やコピー商品といったマイナス・イメージを抱えていることがわかる。また、中国人は日本人を嫌っているというイメージを持っている生徒も一定数いることがうかがえる。

大気汚染	54	
コピー商品が多い	40	
人口が多い	29	
中華料理	23	
日本を嫌っている	13	
貧富の格差	11	
歴史と文化	10	(数字はのべ人数)

また、イメージの情報源については、テレビが25人、新聞が6人、ネットが2人であった。知り合いの中国人という答えは一つもなかった。つまり、中国に対するマイナス・イメージのほとんどはテレビからの影響なのである。同じようなアンケートは2013年も行っているが、回答の内容はほとんど変わっていない。

一方、中国の高校生のイメージも併せて質問した。イメージがわからない生徒が多く、白紙が多かったのだが、書かれた回答の内容を見ると、もっとも多かったのが勉強をしているイメージであり、次に多かったのは日本と変わらないというものであった。

次に、大連第十六中等学校の生徒が作ったビデオレターを見た感想を見る

と、街の様子がよく分かったと答えたものが8人、日本語が上手で驚いたと答えたものが5人であった。回答数が少なかったのは授業時間内に回答を書く時間が足りなかったからであるが、初めて見る大連市の近代的な街並みや日本語を上手に話す大連の高校生に驚いた様子がうかがえる。ビデオレターで描かれている等身大の中国の高校生の生活がテレビで報じられることはほとんどなく、大気汚染や反日デモ、領土問題といったテレビ報道から受ける中国のイメージとは大きな差がある。文章ではなく、映像を伴ったビデオレターだからこそ、こうした情報伝達が可能になったといえるだろう。

映像を見た後、返信用ビデオレターの制作方法を教え、班ごとにテーマを設定する。大連からのビデオレターが街の紹介や学校紹介を中心としたものであったため、同様のテーマが多かったが、それ以外に日本の遊びや日本のアニメの紹介といったものもあった。テーマが決まれば、絵コンテの作成と iPad mini の使い方の説明である。法政大学の学生はテーマ設定と絵コンテ作成からそれぞれの班に入ってアドバイスをを行った。

二日目は、絵コンテ作成を終えた班から撮影に入り、撮影が終わった班はナレーションの録音と編集を行う。そして最終日の午後に発表会を開き、各班の作品について意見交換を行った。

制作を終えた生徒の感想をいくつか抜粋しておく。これらを読むと、中国の生徒にメッセージをわかりやすく伝えようと努力したこと、映像を作るための基本的なスキルを意識していることがよくわかる。ここにあげなかった感想も含めると、授業に参加した生徒全員が制作過程に対しても、制作した作品に対しても概ね満足していることがわかった。

○生徒の感想（抜粋）

- ・ビデオレターは、思った以上に大変なものだった。郊外を調べるときはお店に許可を取ることが必要であるし、3分程度のビデオにするには、どの場面を短くするかなどの工夫もしなければならない。私たちの班は、中国の生徒たちに日本の様子がわかりやすいように、日本の特徴的なところをていねいに紹介しようと努力できた。
- ・面白かった。貴重な体験でした。日本のことをもっと知ってほしい。

104 法政大学キャリアデザイン学部紀要第12号

- ・各班それぞれ違った面白さがあって良かった。相手に見せてわかりやすくなるため手間取った。
- ・ビデオレター作りはいい体験ができ、みんなで協力し合いながら楽しくできた。自分たちの班のビデオレターは、中国の人たちに伝わりやすいものになったと思いました。
- ・他の班のビデオレターのクオリティが思っていたより高かったので、自分の班の動画がどう思われているのか気になった。撮影に時間を取りすぎたので、次にするときには気を付けたい。今回の授業でビデオの理解を深められた。
- ・何度か撮影をやり直したけど、とても良い作品ができあがりました。被ってしまったところもあったけど、自分たちなりにテーマを表現できたと思います。自分は班長としてリードしていく立場だったが、この良い作品は班全員で協力し合えたからこそできたもので、班の人にはとても感謝しています。ビデオレターを作るにあたって、編集の難しさなどがとてもよくわかりました。
- ・最初は絵コンテや構成を考えるのが大変だったけれど、撮影や編集は楽しかったし、完成した時に達成感があったので、良かったです。また、中国の人たちに日本のことを伝えられることができたと思うので、良かったです。
- ・自班の制作については、たった3分の映像をつくるだけでも丸二日の制作期間が必要なことに驚いた。また、事前に撮影する場所や事柄を決めておくスムーズに進むことも分かった。
- ・がんばってやっていた班はそれだけいい作品ができていた。日本のことがわかってくれそうなものが多かった。作ってみて、3分くらいのものにたくさんのかかったのか、テレビの番組はすごいなと思った。

大連市立第十六中等学校におけるビデオレター制作

先に述べたように、大連市立第十六中学校では2011年から実践を行っているが、本稿では、2014年の大連市立第十六中学校での実践について触れておきたい。筆者は大連市内にある第十六中等学校を訪れ、2014年10月31日と11月3日に1コマ（90分）ずつの授業を行った。法政大学第二中学校の生徒の作った

ビデオレターを上映するとそれだけで1コマかかってしまうため、あらかじめDVDに焼いて送付し、事前に見てもらうことにした。参加した生徒は5年生(高校2年生)14名(そのうち男子2名)である。2人ずつ7つの班に分けることにし、7台のiPad miniで作品を作ることにした。

ビデオレターを見た生徒の感想の一部を抜粋して下に掲載する。ビデオレターを見た感想のほとんどが、日本の学校がきれいであること、学校生活が面白そうであること、生徒は礼儀正しいということを指摘していた。日本語を履修している点から考えても当然であるかもしれないが、ほとんどすべての生徒が日本に対して好印象を抱いていることもわかる。こうした彼らの感想は日本の生徒が抱いている中国人のイメージと大きくかけ離れたものである。

○法政第二中学校のビデオレターを見た感想(抜粋、一部日本語を修正)

- ・日本の中学生が作った映像を見てとてもいいと思いました。日本の学校はとてもきれいで、大きいです。うらやましいです。日本のいろいろな授業はとてもおもしろいです。日本のいろいろな場所はきれいです。この映像を見てから日本のイメージがよくなりました。
- ・日本は私の心の中で一番きれいな国です。交通が便利です。日本の風景も素晴らしいです。日本人は仕事をするのが真面目です。礼儀正しい人です。大連には日本の料理店がいろいろあります。私のクラスメートの多くの人が日本の音楽が好きです。日本の高校と中国の高校はちょっと違います。私の高校の運動の時間は体操をしたり、バレーボールを練習したりします。ときどきバレーボールのテストがあります。とてもおもしろいです。
- ・中学生の時、日本のアニメ作品を通して、日本のことを少し知りました。だけど、日本の学校についてはあまり知りませんでした。今回の法政二中からの学校を紹介するビデオを見たあと、よく理解しました。日本の豊かな学校生活や勉強と休憩のバランスのとった暮らし方を見せてもらいました。とくに露天風呂に大変興味があり、学生たちも礼儀正しく、よく勉強になりました。
- ・法政二中のビデオレターは日本の各方面についてよく知らせました。日本の学生の放課後の生活は多彩で、教学設備もたくさんあります。日本の学生は

106 法政大学キャリアデザイン学部紀要第12号

皆優しくて、礼儀正しいと思います。学校の周りの環境もよくて、勉強するのに役立ちます。

- ・日本の学校は印象深かったです。学校の周りの景色は綺麗で、設備も完備していて、そして勉強する雰囲気がすごくいいと思います。とくにプールもあるなんてびっくりしました。学生の放課後の活動はさまざまあります。日本の学生は明るくて可愛い！
- ・このビデオを見て、日本の中学生の日常生活をよくわかりました。日本の学校はでかいなあ、設備も完備しているし、放課後の生活も面白そう。日本の中学校の屋上にプールがあるなんて私は知らなかった。日本の中学生生活を体験したいなあ。一日でもいいから、すごくしたい！

授業は、第十六中等学校の日本語科を担当している王慧教諭と協力しながら行った。また、昨年から大連外語大学の学生二名が授業のサポートを行っている。筆者が学校関係者、大学関係者に聞いた限りでは、中国で大学生が地元の公立学校の授業支援をする事例は聞いたことがないという。一般的な中国の公立中等学校の授業は、講義形式の授業が多く、ビデオレター制作のようなワークショップ型の授業が少ないことがその理由の一つであると考えられる。

今回、授業の支援にかかわった二人の学生は、2013年にデジタル・ストーリーテリング制作を行った経験があり、その後の第十六中等学校の授業支援も行った経験がある。そのため、今回の授業では、二人の学生と王慧教諭による支援を得て、短い時間にも関わらずスムーズに進めることができた。とりわけ、大学生が支援に入ったことで、制作中の二日間、生徒たちは質問があると、直接支援大学生に連絡をしていたという。日本語学習についても先輩であり、目標でもある大学生が支援を行うことで、学生にとっても生徒にとっても大きなメリットが生まれる。

今回、iPad miniについての使い方の解説を行う時間が少なく、内心とても不安であったが、結果的には杞憂に終わった。生徒たちは幼稚園の頃にすでにiPadを授業で使った経験があるということがわかった。映像編集についても、生徒同士で教えあうことで、十分対応できるということがわかった。

11月3日は編集と発表会を行ったが、発表会の時間が足りず、途中で終了す

ることにしたところ、生徒からの強い要望により、時間を延長して発表会を行うことになった。制作を行った生徒の感想は以下のとおりである。法政大付属第二中学校の生徒と同様に、制作上の苦勞をしながらも制作を楽しんでいること、班活動により、中国の生徒間でも理解しあうことができたという内容があること、そしてメッセージを送る対象である日本の生徒にわかりやすく伝えたいという思いが共通していることがわかる。

○生徒の感想（抜粋、一部日本語を修正）

- ・今回の撮影は予想のどおりではなかったです。順調ではなかったです。途中、たくさんの困難がありました。でも、私たちはもっと努力して、作品を完成させました。自分でやりとげるチャンスをいただき、本当にありがとうございました。今後も、ビデオレターを作りたいと思います。ありがとうございました。
- ・ビデオレターを作るために、私たちは全員集中していました。日本の友達が私たちの作品が好きであることを願っています。時間の原因で、たくさんの話したい言葉はビデオレターで出ませんでした。日本の友達が私たちの作品が好きであることを願っています。連絡してね！
- ・今回の活動を通して、どんなことも簡単じゃないことを身にしみて感じました。いい作品を出すために、真剣に努力しなければなりません。一緒に頑張ろう！
- ・今度の撮影はとても面白かったです。でも、時間が遅くなったので、友達のうちに泊まりました。サプライズもありました。チャンスをいただいて、本当にありがとうございました。今後は、こんなに面白い中日交流はしたいです。ありがとうございます。
- ・この活動はとても面白かったです。実行と操作の能力を育たれました。そして、チームワークは大事なのが分かりました。今回の発表会でクラスメートの普段私が知らない才能を発見しました。すごく嬉しかった。今後は、こんなに面白い活動をしたいです。日本の学生たち、休みの日はどう過ごしますか？楽しみですか？
- ・今回の撮影を通して、撮影の経験がありました。もっと日本のことを分かっ

108 法政大学キャリアデザイン学部紀要第12号

てきました。身の回りの友達と仲良くなりました。彼女のこともよく知っています。この活動を大事にします。

- ・撮影の時間で、辛さを感じました。でも、最後の発表会でみんなの作品を見て、とても嬉しかったです。今後は、こんなに面白い活動をしたいです。
- ・ビデオレターを作って、日本の学生たちは中国の文化と私たちの学校生活を了解させます。日本では、最近人気のあるスターはどなたですか？最近人気のあるドラマはなんですか？最近人気のある俳優はどなたですか？
- ・日本の学生たちは中国の文化と私たちの学校生活を了解させたいです。あなたたちはどなたのスターが好きですか？人気のあるドラマはなんですか？
- ・みなさん、こんにち。交流できて、嬉しかったです。私は日本が好きです。日本の文化に興味があります。日本の飲食と服も興味があります。未来は日本に旅行したいです。就職もしたいですよ。
- ・ビデオレターを作る最中に、たくさんの計画がありました。しかし、天気のせいで、少しのところで撮影できなかったです。困難もいっぱいありました。初めて、ハロウィーンのために、化粧して、自分もびっくりしました。これは誰？全然自分の元の顔が見えませんでした。メイド喫茶店とはおいのでいきたくなかったです。そして、ワンピースのバーの飲み物は高く、パーティの時間も遅いから、行けなかったです。ともかく、とても嬉しかったです。
- ・今回の撮影の途中でたくさんの困難がありました。まずは天気の原因で、土曜日だったのは日曜日に変えました。そして、時間がぎりぎりです。撮影の途中で、自分の話し言葉はよくないので、中止回数が多かったです。時間がかかって、ようやく完成しました。最後出す作品を見て、少しだけ不満ですが、全体的に、満足です。

次に、授業支援に参加した大学生の感想を下に載せておこう。すでにデジタル・ストーリーテリング制作を経験している学生たちにとっては、自分たちが学んできたことを中等学校の生徒に教えることによって、自分たちがやってきたことを振り返る契機になっていることがよくわかる。それは単なる支援という経験を越えて、それ自体が学習のプロセスとなっていることを意味している。

○支援大学生の感想（抜粋、一部日本語を修正）

・Aさん

今回は、以前のデジタル・ストーリーテリングの代わりにビデオレターを作りました。ビデオレターというのは、ナレーションは少なく主に撮影した画像でテーマを表現するということです。最初の授業で先生の制作説明が終わったあと学生たちのテーマを決める真剣な姿が一番印象深かったです。二人で相談して、何を紹介するか、日本の学生たちは何が知りたいかを考えて、自分のテーマを決めた。

そして二日後の発表会で編集された作品を全て見終わった後、非常に感動した。この自分の熱気をこめて真面目に作った作品は一種の芸術だと思います。画像や音の組み合わせで見ると人を感動させました。

それだけでなく、学生たちからの異国の同い年の人と交流したい気持ちも強く感じました。外国語を勉強する学生のみならず、人間は皆そうなると思います。他の国の人たちは平日何をしますか、何を食べますかなどいろいろ想像することがきくとあると私はそう思います。坂本先生は「今後多分日本の学生たちを中国につれて、学生たちを直接に交流させるように」と言いました。私はその日を期待しております。

・Bさん

2年前、私は坂本旬教授の生徒だった。あの時、外国人の同時代の学生たちが作ったビデオを見て、とても感動した。その中では、彼らの学校生活とか、日常生活とか、あるいは、国の古典的のものと飲食文化などが印象的だった。特に、深い意味を含んだ作品、例えば、人生と夢と現実などを表現するのが大好きだ。たったの3分の中で、溢れる想いが伝達できる。当時、私は自分にひと言葉を言った。世界に行きたい、世界を見たい。

今、アシスタントとして、自分のやったことを後輩にシェア出来るのが、すごく嬉しい。姉さんと呼ばれて、通訳し、iPad 活用を協力し、写真を撮る、この感じはいいなあ。土曜日に、後輩は WeChat で、私に連絡した。「ねえ、お姉さん、ちょっと聞きたいのですが、見た目もいいし、味も美味しいって、日本語でどう言うの？」今は夜8時。「ねえ、お姉さん、今から撮影するなら、

遅くない？画面が黒くなると、大丈夫かな？」「でも、なるべく見えるようにやってくださいね。日曜日にしてもいいよ、月曜日発表だから」と返事をした。後輩からの質問を聞いたら、後輩たちが自分の作品にどんなに真面目に、どんなに努力しているのかわかった。その態度は褒められるべきだと思う。

授業の中で、坂本教授は日本の生徒が作ったいくつかのビデオレターを流した。生徒たちは興味深く見た。青少年は国にとって、まるで朝日のようだ。彼らは国の未来と希望だ。坂本旬教授の研究はとてもやりがいがあると思う。別々の国の青少年たちは、ビデオレターの形式を通して、文化と時代の特徴などを交流できる。そして、青少年たちは普通手に入れない情報を得て、世界に関心をもってきた。

青少年時期から、もっと好奇心があって、国際的な目から生活を見る。近視眼な見方を消すことが大切だと思う。各国の学生が互いに交流するだけではなく、さらに自分の国のことももっと理解できるようになると思う。この活動を通して、生徒たちは自分で資料を探し、放課後の生活をよく味わい、自分が住んでいる街をよく観察できる。彼らの目から、この街はどんな街か。私たちはわかる。なぜならば、彼らは一番正直で純粋な人だ。そして、日本語の練習もちゃんとできる。

どんなテーマを決めるか。何を撮影するか。どんな作品が出るか。教授も私も、すごく楽しみだった。確かに、毎年、生徒たちは17歳時代の特徴を見せてもらう。その一部一部の作品は流れたと、すぐに、いいなあって褒められた。後輩の笑い顔を見ると、とても感動した。みんなは、坂本旬教授からもう一度授業を受けたいと言った。大成功だった。

大連市立第十六中学校の生徒が作った作品は帰国後すぐに法政大学付属第二中学校に送り、担当教師が生徒に見せている。日本の生徒たちは中国からのビデオレターを見て何を感じただろうか。「大連の作品への感想」「作品から見た大連の街や紹介された文化に対する感想」「日本語の感想やコメントに対する感想」および「その他」の4項目で感想を書かせた。

圧倒的に多かった感想は、中国の生徒の日本語のうまさである。中には、「自分たちのために一生懸命、日本語を話してくれてよかった」「向こうはこちら

にも分かりやすいように、日本語で送ってくれたにもかかわらず、こちらは日本語ですべて伝えていたので、申し訳ないと思った」「僕たちに伝わるレベルの日本語を使っていたため、大連第16中学校のことがわかりやすく伝わっていた」といった感想もあった。

また、作品の質の高さに注目した感想も多かった。「自分たちが作ったものより手が込んでいると思った」「とても工夫がしてあり、良かった。」「わかりやすく現地の様子が伝わった」「とても上手に編集ができていた」といったものである。作品の質が高いということはそれだけ中国の生徒のメッセージは日本の生徒に明瞭に伝わるということである。

「中国の中学生の日常が分かった」「中国の魅力が伝わる作品だった」「夜の屋台など、夜の様子が分かった。カラオケなどの娯楽の様子もわかった。楽しそうだった」といった中国の町や中学生の日常生活に注目した感想や「日本のアニメや文化などが伝わっていてよかった」「日本と同じもの、違うものがあったが、文化的には隣国なのだから、にてると思った」「カラオケが日本と同じような感じだったので、中国と日本の町並みは似ている気がした」「日本では見かけない食べものが多く、とてもおいしそうだった」「日本の文化も中国にあったことがうれしいです」といった日中の文化を比較した感想も数多く見られた。

中国に否定的な感想は一つもなく、「その他」に書かれた「現地に行ってみたいと思った」「自分が思っている中国のイメージが変わった」という感想が生徒全体の気持ちを代表しているといえるだろう。たった一度のビデオレターの交換だったが、日本の生徒の中国に対する意識が大きく変わったのである。

なお、2015年には再び返信のビデオレターを制作することになっている。ただし、同じ生徒が再びビデオレター制作をするのではなく、次の学年の生徒が制作することになる。このことは、「異文化対話の螺旋的発達」とっては一つの課題といえるだろう。

まとめにかえて

筆者が『メディア情報教育学』（法政大学出版局、2014年）で述べたように、異文化対話には、correspondence（交換）、communication（交流）、そして

collaboration (協働) の3つの局面がある。筆者はこれを「異文化協働アプローチ」と呼んだ⁽⁹⁾。「交換」はお互いにさまざまな情報をやりとりすることだが、この局面では交流よりもメッセージの創造と読み解きが重視される。ビデオメッセージやビデオレター、デジタル・ストーリーテリングの交換はまさに「交換」の局面にあたる。異文化対話発達のプロセス全体から見れば、ほんの入り口にすぎず、最終的には「異文化協働」の局面をめざさなくてはならない。

実際に国外に出ることが難しい小学生や中高校生にとって、国外の他者との異文化対話は困難な課題である。しかし、ICTは、かつては困難であった課題を乗り越える土台をもたらししてくれた。とりわけタブレット端末の技術の可能性は大きく、以前は手間のかかった映像制作を身近なものにし、誰にでも使えるコミュニケーション・ツールに変えた。

本論文で見てきたように、「異文化協働アプローチ」による異文化交換学習は、子どもの発達段階に即しつつ、交流の前提となる表現力や想像力、他者と協力する力などを養う。また、他者の制作した映像からメッセージを読み取る学習を通じて読解力も養うことができる。それぞれ異なった文化的背景を持つ国の子どもたちは、「交換」と「交流」の局面を経て、一つの目標に向かって協働しながら一つの作品の制作やプロジェクトを実施する「協働」の局面をめざす。異文化対話による新しい価値の創造こそが「異文化協働」の目標である。教師や子どもに「交換」や「交流」の能力や経験がなければ、「協働」は実現しない。筆者が考えるメディア情報リテラシー教育の最終的な目標は、異文化協働の学習を世界中に広げ、一つのボーダレスな学習共同体を作ることである。

中国にとって、メディア情報リテラシー教育をフォーマルな学校教育に導入することは困難な課題である。Qinyi TanらはChen Changfengの言葉として、次のように述べている。「メディア・リテラシー教育の意識向上は重要であるが、フォーマルな学校制度に導入することは大変困難である。なぜならば、独立した教科、教員研修、カリキュラムや試験・評価制度の設置、社会的認知の涵養には長い発展の過程が必要になるからである。」⁽¹⁰⁾こうした事情は中国だけではなく、日本においても変わらない。

しかし、本論文の冒頭で述べたように、メディア情報リテラシーは「拡大さ

れたリテラシー」であり、「異文化間対話、寛容、文化理解を可能にする強力な道具」である。そのような観点から言えば、独立した教科でなくても、メディア情報リテラシー教育は可能である。実際、本実践で行われた授業は、修学旅行の準備学習であったり、日本語教育であったり、あるいはキャリア教育の一部であった。日中間で同じ授業を実践することを可能にしたのは、異文化対話の教育理念が日中の教員・教師に共有されているからである。つまり、重要なのは独立した教科を作ることではなく、既存の教科や教科外教育の中にメディア情報リテラシー教育の理念と実践を埋め込むことである。

しかし、本論文ですでにふれたように、「異文化対話の螺旋的発達」という課題が残る。一度だけの学習経験では、交換—交流—協働の局面を経た「異文化対話の螺旋的発達」を可能にすることは困難である。これを実現するためには、教科や学校種の枠を超えた教職員研修と教材・教育方法の開発が必要であろう。

[注]

- (1) Public Religion Research Institute, Analysis | Race and Americans' Social Networks, <http://publicreligion.org/research/2014/08/analysis-social-network/>
- (2) 言論 NPO・東アジア研究院「第2回日韓共同世論調査日韓世論比較分析結果」<http://www.genron-npo.net/world/genre/cat212/post-287.html>
- (3) 同上「『第10回日中共同世論調査』結果」<http://www.genron-npo.net/world/genre/tokyobeijing/10-7.html>
- (4) UNESCO (2013), *Global MIL Assessment Framework*, p.30.
<http://www.unesco.org/new/en/communication-and-information/resources/publications-and-communication-materials/publications/full-list/global-media-and-information-literacy-assessment-framework/>
- (5) *Ibid.*
- (6) UNESCO (2013), *MIL Policy and Strategy Guidelines*, p.17
<http://www.unesco.org/new/en/communication-and-information/resources/publications-and-communication-materials/publications/full-list/media-and-information-literacy-policy-and-strategy-guidelines/>.

114 法政大学キャリアデザイン学部紀要第12号

- (7) 筆者がビデオレターの可能性について考えるきっかけとなったのは2005年に淡路島で開かれた i-EARN 国際会議に参加して知った、小学校間の国際交流実践報告であった。実際にビデオレター制作を行ったのは2009年の都内小学校の実践からである。この段階ではタブレット端末ではなく、DVカメラと PC を活用した。
- (8) 国際交流フォーラムは、利用者向けのメール配信の中で、廃止の理由を「2007年11月の開設から6年目になりますが、年々古くなっていくシステムをいま大幅に改修するよりも、当時と比べて圧倒的に身近になった各種のソーシャルメディアを組み合わせる交流を推進するほうが現実的だと判断したためです」と述べている。(2013年5月8日)
- (9) 坂本旬 (2014)『メディア情報教育学』法政大学出版局、pp.157-158.
- (10) Qinyi Tan, Qian Xiang, Jingya Zhang, Luyan Teng, and Jiali Yao, "Media Literacy Education in Mainland China:A Historical Overview", *International Journal of Information and Education Technology*, Vol. 2, No. 4, August 2012,p.385.

ABSTRACT

Interschool video exchange practice using tablet PCs between Japan and China

Jun SAKAMOTO

It is inevitable that students have skills to produce films conveying the specific companion messages and to comprehend the essence of video letters respectively. Our goal is to improve their comprehension in the real circumstances of the same young generation through acquiring these skills, not forming the stereotype images to each country.

I have implemented the workshop using iPad at the Dalian No.16 High School since 2011. I also carried out another one of the digital storytelling at Dalian University of Foreign Languages in 2013. Eventually, the students who learned how to produce video have been supporting the production at the Dalian No.16 High School. It is one of approaches to learn Japanese.

Though the situation between China and Japan was deteriorated by the anti-Japanese demonstration following the territorial issue, I've often visited Dalian University of Foreign Languages and realized a reliable relationship with the University.

The exchanging video letter program between the Dalian No.16 High School and the Daini Junior High School of Hosei University is a quite simple one. In Japan, it took three days to watch video letters from China and make video letter as reply in July.

The Japanese students were surprised how fluently the students of the Dalian No.16 High School spoke Japanese and tried to catch various messages from the films. While the Chinese students attempted to convey many scenes in the city of Dalian and their school life. Next, the Japanese students started making video letters with small groups for their messages

which they want to tell the Chinese students. On the last day, we had an event to evaluate the films each other. Please check out some scenes making the films and some of the works.

I did two 50 minute workshop in two days at Dalian No.16 High school. On the first day, I explained how to make video letters. We had the first class on Friday, and the students made video-filming of scenes in the city and the school with small groups by using iPad which I lent during weekend. On Monday, we had the second class to compile and appreciate the films. Please take a look at some scenes of making films and some works.

The media system often generates stereotype views. On the other hand, it has a roll to strengthen bonds between us. I'm convinced that the media and information literacy is essential to encourage the bonds.